「金融教育を考える」第7回小論文コンクール

特 賞

マネー・コンピテンシーの育成を目指した単元開発

－「コミュニケーション・メディア」としての貨幣から“つながり”をみつめる活動を通して－

大阪府・豊中市立刀根山小学校　谷本　千保

知るぽると
www.shiruporuto.jp
金融広報中央委員会

1　問題の所在

子どもによる犯罪事件の報道や、学校現場における生徒指導上の問題行動の事例報告を静観してみると、お金を家庭から持ち出し散財する行為や、持ち出したお金やお小遣いでおごったりおごられたりする行為、お金の貸し借り、更には万引きや金銭強要などの反社会的行動も含め、お金が介在している事例を目にする。しかもその金額が非常に高額になってきていることに驚かされる。個々が抱える心の問題に加え、子どもを取り巻く環境や人間関係等が複雑に絡みあっている上、そこにお金が介在しているという事態が指導を困難にし、現場を悩ませていると推測する。この傾向を裏付けるかのように警察庁（2004）は平成10年代の非行を「遊ぶ金欲しさ」型[1)]と公表している。子どもたちが他者とつながりを持ちたい、つながっていたいという欲求を実現させる媒介物として、お金やモノが機能していることがこれらの背景にあるのではないかと考える。問題行動や反社会的行動は、親や友だち、あるいは社会とつながっていたいという、絆を求める積極的な人間関係の希求ではないだろうか。つながりを可能にする一つの手段がお金であり、お金によって得ることができるモノであると認識してしまった子どもの姿がそこに存在していると推測せずにはいられない。

認めてもらいたい、良くみてもらいたい、独りになりたくないという強い思いが、手段としてのお金を絶対視するようになり、目的へと転化させる。そこには、お金の役割や機能に関する認識不足、自律心や主体性の欠如、社会生活及び人間関係における相互作用やリスクなどの具体的な功罪の未経験など、お金の本質を理解していない子どもの実態がある。

これまで生き方にかかわる重要なお金という課題について、学校で積極的に触れてこなかった。しかし今やこの課題に大人も子どもも真剣に向き合わなければならない社会になっているのを感じる。お金に関して教育の中心は家庭教育であることは言うまでもない。しかし家庭の機能や親の価値観が多様化している今日、家庭教育と学校教育で担うべき役割を明確にしつつ、学校教育で身につけさせたい力、学ばせるべき内容など、具体的な指導の在り方の構築が急務であると考える。

2　課題設定

これまでお金に関する教育は、金銭教育を中心に貯蓄や節約・節制、家計管理などをねらいとして主に道徳教育や家庭科の中で展開されてきた。お金を学ぶ教育の中核を成す金融教育も、長年実践されてきた金銭教育のノウハウを継承しながら、消費者教育やキャリア教育、経済教育などの分野と関連付けを行い、企業や外部機関と積極的な連携を図りながら推進されてきている。

更に今回の新学習指導要領においては、小学校5年生の社会科の学習内容に、価格や費用という文言が付け加えられたように、教育課程上にお金に関連する項目が明示された。

こうした動向の背景には、グローバル化、金融リテラシー不足による消費者・金融トラブル、ニートやパラサイトシングルなどに見られる就労意識の変化などが社会問題となり、国家的な課題として認識されるようになったという事実がある。そこでこれらの課題に対応する形で、学校教育において金融教育を行うように示されたのではないかと推測する。

学校教育でお金にかかわる内容を指導するにあたり、金銭教育・金融教育の実践事例を調べてみた。するとそこから一つの課題が浮き彫りになった。それは多くの実践が、お金というものを知っている前提で進められているという問題である。前述の5年生の価格や費用の理解という項目に関しても、価格の理解にはお金を認知している必要がある。にもかかわらず、それを学ぶ場が設定されていない。

田丸敏高（1997）は、物の背後に存在する社会＝人と人との関係に気付かない限り価格の意味は理解できないと述べている[2)]。お金を経済学の範疇で捉えた科学知の学習ばかりが先行し、お金を「コミュニケーション・メディア」[3)]として“つながり”から捉える視点が弱いのではないかと感じる。経済的視点にとどまらず、主体である「わたし」と他者や社会とを結び付ける媒体「コミュニケーション・メディア」としてのお金の性質を捉えておく必要があるのではないだろうか。生活環境や価値観が多様化した社会で、資金管理や資産運用、経営や生産・販売、自明視された価値だけを教える学習では、子どもに切実感を持たせることは困難である。同時にそうした学習では、社会で頻発しているような金銭絡みの問題行動や反社会的行動の抑止力には到底成りえない。お金にかかわる課題を個人的な問題として帰結させず、お金の持つ両面価値を、人や社会、文化や歴史とのつながりの中から気付かせ、善悪の判断だけでなく、自己の価値観を涵養し、他者と交流して認め合ったり合意形成を目指したりすることが、最も学校や社会に必要とされていると考える。

そこで、お金を「コミュニケーション・メディア」であるという視点で捉え、お金がどんな機能を持ち、自分と他者、あるいは社会との相互関係にどんな役割を果たし、どのような影響を及ぼすかを、子どもの既有の知識や経験をもとに内面から

©金融広報中央委員会 2010

引き出し、相互交流を通じて意味づけていく活動を提案したい。子どもにとっての“お金”を問い直すことにより、お金の持つ意味や役割を他者や社会とのつながりをもとに理解させ、お金に対する知識や技能、見方や考え方など、お金において大切な総合的な力、“マネー・コンピテンシー ”を育むことをねらいに単元開発を行った。

お金の役割や機能を知ることを出発点に、自分とお金との間に適切な距離を保ち、上手に活用しながら生涯にわたって幸せを創造できる子ども、それが目指す児童像である。その実現のために必要な“マネー・ コンピテンシー ”とは何かを学びの中から見出し、それを身につけることを目指す。生活の中で実践しようという意欲や意識を高めるとともに、具体的な行動を喚起できるような取り組みにしたい。（資料１参照）

3　マネー・コンピテンシーの育成にむけて

コンピテンシーはリテラシーなどの従来の能力観を含み、態度や実際の行動、成果までを包括した能力であるとされる。また特定の状況の中で、（技能や態度を含む）心理社会的な資源を引き出し、動員することにより複雑な需要に応じる能力を含んでいる[4)]。コンピテンシーの基礎となるキー・コンピテンシーの条件として、

1．社会や個人にとって価値ある結果をもたらすこと
2．いろいろな状況の重要な課題への適応を助けること
3．特定の専門家だけでなく、すべての個人にとって重要であること

の3つが挙げられている。よってマネー・ コンピテンシーの策定はこの3つを前提にする必要がある。OECD加盟国間で国際的合意を得ているDeSeCoプロジェクトは、1）相互作用的に道具を用いる、2）異質な集団で交流する、3）自律的に活動する、の3つの広いカテゴリーにコンピテンシーを分類している。1）は社会・文化的、技術的ツールを相互作用的に活用する力、2）は様々な背景や考え方を持つグループで適切に人間関係を形成する力、3）は自律性と主体性を持って行動する力、の育成が望まれていると考えることができる。更にコンピテンシーには私事化、個別化しないための “思慮深さ”という倫理も内包されている[5)]。この定義にお金という事象をあてはめて考えると、お金はこの場合の道具（ツール）として相互作用的に用いられなければならないし、お金に対する私的な見解と公的な見解を場に応じて交流する必要があるし、何よりお金にふりまわされない自律心と主体性を持たなければならないということになる。

しかしここで問題なのは、お金において大切だと認識する内容が、必ずしも全員同じとは限らないということである。置かれている環境や状況など、個別性が強いことはもちろんのこと、年齢や世代によってもお金の持つ意味や価値は確実に違っているはずである。マネー・コンピテンシーとは一体どんな能力観だと定義すればよいのかが大きな問題であり、しかもそれは、教師の価値観で一義的に意味づけを行い、価値の注入を行ってよいものではないはずである。

そこで今回の取り組みでは、児童が自身の生活経験と結びつけ、つながりを通してみつめる中で「今の自分たちにとって必要なマネー・コンピテンシーとはどんなことか」を、コンピテンシーの3つの枠組みに沿う形で生活レベルに落とし込んで見出していく学習活動を展開したい。話し合いを中心としたコミュニケーション活動を通じてマネー・コンピテンシーを自己内に見出すことで、ジンメルのいう“貨幣的態度”（対象を客観化し距離化する態度）をとろうとする意欲と実践力を養うことができるのではないかと考える。

4　単元設計　（資料２～５参照）

（１）全体的な単元構想

貨幣機能についての学習は中学校の社会科に位置づけられており、中学校で学習すべきではないかという見方もできる。しかし問題行動への対応を視野にいれると、やはり中学校では遅すぎる感が否めない。「兵庫県下の少年非行の概況（刑法犯少年）」[6)]を見ると、小学生と中学生の刑法犯の総数を比較すると約20倍に膨らんでおり、罪種別総数では窃盗が群を抜いている。生徒指導における開発的・予防的教育としての期待や、学習指導要領や社会的発達などを配慮すると、小学校5年生を対象に、比較的学習の弾力性の高い総合的な学習の時間で取り組むのが妥当ではないかと考えた。

授業仮説を「相互依存関係を前提に、マネー・コンピテンシーを育むための学びの場を設定すれば、金銭的課題及び物的欲望に対峙したときに、意識的に貨幣的態度をとろうとする意欲と実践力を養うことができる」とし、相互交流を活動の中心に据え、マネー・コンピテンシーと総合的な学習の時間で育てたい資質や能力の関連性を図りながら、自己の生き方を考えることができるような主体的な学びの場を設定することでねらいに迫らせたい。

©金融広報中央委員会 2010

単元のねらいは前項のコンピテンシーの概念枠をもとに、

ⅰ.お金に関する知識・技能を理解し活用する（知識・技能を活用する）

ⅱ.お金に責任を持つ（自律心と主体性を持つ）

ⅲ.お金に対する価値観を認め合う（価値観を認め合う）

の3点を設定する。

単元開発の際に重視したことは、教師の誰もができそうだと思える汎用性の高い実践にするということである。研究発表やスクールフェスティバルを想定したような多くを巻き込んで創る“打ち上げ花火”的な見栄えのする実践や、事前準備や連絡調整に労力を要する実践ではなく、次年度も継続できる、教室を基本にした地に足のついた実践になるように意識して内容や教材を工夫した。配慮事項として、様々な価値観の交流に際して、個別の金銭事情や家庭状況などを直接問うような場面は設定していない。お金を取り上げることへの抵抗感や深刻さ、お金と自分を見つめる負担などを軽減させることを意識した。

（2）道徳教育との関連性

お金という課題は、道徳教育のテーマとしては、個人に内在する価値意識を表出させるうえ明確な答えの出ない非常に複雑かつデリケートな問題である。こうした特徴からも学校現場ではなかなか取り組みに至らない課題となってしまっている。しかし今日的課題として金銭感覚の欠如、社会性やモラルの低下が浮き彫りになり、多くの犯罪をも招くようになってしまった以上、お金について学ぶことを避けて通ることはできない。貨幣経済の枠組みで金融教育を展開する前に、あるいは並行して道徳的側面からのアプローチを行わなければならないのではないか。人間の生きる営みは、経済活動と結びつかないものはなく、みなが貨幣共同体に身を置かざるを得ない。だからこそお金と人の心とのつながりを同時に考えていく必要がある。

そこで本単元では、総合単元的道徳学習を視野に入れ、単元の中で最も効果的であろう段階に道徳の時間を設定した。また道徳の時間の事前・事後に展開される学習にも道徳性を耕す側面を持たせ、道徳の時間と関連付けていくような形になるように工夫した。道徳の時間で取り上げる内容も、価値の教え込みや伝達を避けるために、子どもの生活に即した切実性があり共感性の高い資料を作成したり、事前・事後の学習内容を補充・深化・統合できる内容を選定したりするなど、教師主導の道徳ではなく、子ども主体の道徳を展開することを目指した。

（3）言語活動及びコミュニケーション能力の育成との関連性

「お金をつながりを通して見つめる」「コミュニケーション・メディアとしてのお金」という視点で学習を展開していくからには、相互交流による意見交換は必須である。

お金という極めて哲学的な課題は、価値観が多様で正答が定まらない問いであり、終わりなき課題である。このような課題をあえて取り上げる意義は大きいと考えている。なぜなら、お金に対する見方や考え方、扱い方が人によって違っているにもかかわらず、人間は多かれ少なかれ何らかの形でお金を媒介した生活を営まなければならないからである。換言すると、お金という課題は様々な視点から積極的に検討する中で、納得できる見方や考え方、取り扱い方など、解決の方策をコミュニケーションによって創造していくことが求められる課題であるといえる。1,000円札を、1,000円の価値があるとお互いが承認しているからこそ、1,000円として使えるというやりとりからわかるように、お金そのものが、自分以外の他者との合意が何よりの前提になって価値を形成しているものだからである。

したがって本単元では、お金という課題を中心に据えて、子どもたちが知識や経験から意見を交流し、討議することを通して、個々人の中で価値や規範を吟味し判断するとともに、その価値や規範に関して、みなの意見を調整しながら答えを創造していくことができるような活動を多く取り入れた。これは渡邉満の、話し合い活動による価値の創造を通じて、コミュニケーション能力の発達と、道徳性（相互行為調整能力）の発達を目指す道徳授業モデルに依拠したものである。

活動の基本形態を生活班に置き、班での話し合いや活動が積極的な学びの場となることを期待する。それには班が、互いに相手の発言を認めると同時に、相手の発言に対して自らも自由に意見が言える理想的な発話状況にあることが前提となる。また、コミュニケーションの方法を聞く・話すだけにとどめず、絵や図、文章で表現させるなどの工夫をした。視覚化することで、言語面で支援を要する子どもも考えや思いを伝えやすくなるだろう。

コミュニケーション活動を円滑に進めるためには、学級や班の中で一人ひとりが認められ、尊重されていなければならない。日々の学級経営で人間関係を育んでおくことが活動の土台となることは言うまでもない。

©金融広報中央委員会 2010

（4）他教科・領域との関連性

総合的な学習の時間を展開する上で、教科・領域との関連付けを行っておくことは学びをより深めるのに必要不可欠である。小学校5年生で行うのが効果的であると前述したのは、5年生の学習内容に関連付けがしやすい単元が設定されているからである。例えば算数科では、B量と測定の領域で、割合や単位量当たりの学習に関連させることができる。また家庭科ではD身近な消費生活と環境の領域で消費と結びつけて考えることができる。社会科では、産業学習にかかわって価格や費用の理解の促進に役立つはずである。年間カリキュラムを作成する段階で、教育内容を構造化し単元配列に系統性を持たせると、子どもにお金を学ぶ必然性を感じさせることができ、一般化しやすくなると考える。更にお金という課題は個別性が強いため、学校教育で取り上げるにはリスクが高いという問題にも、教科や領域と関連性を持たせることで説明責任を果たせ、クリアできる場合も多い。

それぞれの活動が点で展開されるのではなく、一つひとつの活動を意味づけし、点につながりを持たせ、面の活動になるように設計することが重要である。

（5）保護者や地域、外部機関との連携

お小遣いをどうするかという問題は、学級懇談会で話題にのぼることが多かった。2010年5月の読売新聞でもこの問題が連載されていた。こうした実情から、保護者もお金の教育に頭を悩ませていることがわかる。

保護者の理解や協力を得るためには、学習に入る前に学年だよりや学級通信でねらいや内容を提示し、学習内容に対する懐疑心や不信感を払拭しておくことが必要である。また随時学習の様子を伝え、意見や感想を寄せてもらうのも一つの方法である。具体的な実践の場としての家庭に期待し、積極的に活動に興味・関心を持ってもらうように努力しなければならない。

外部機関との連携に関して本実践では、市内の5年生対象に行われる非行防止教室の中で、警察の方にお金にかかわる問題行動や犯罪を話題に取り上げてもらうように依頼した。規範意識や善悪の判断について、教師や保護者とは違う立場で語ってもらうことで、社会的な物の見方や考え方を養うことができる。

（6）評価について

本単元の評価は他者との相互交流により課題を解決していく過程を総合的に評価しなければならない。授業観察を基本とし、学習カードや絵での表現、キャッチコピー作成やその説明等、多様な表現ができるように方法を工夫した。お金自体が具体的に説明できる場合と、なんとも説明し難い抽象的な様相を帯びている場合があることと個別教育ニーズを考慮した為である。自分と他者や社会と、お金とのつながりを意識した学びがねらいに則した形で表現されていることが望まれる。

5　実践にむけて

この単元計画は11月に勤務校で実践予定である。この単元計画がどの程度実践可能で、子どもの学びとしてどの程度効果があるのかについては現段階で述べることはできないが、実践後に学習内容や方法、教材の妥当性の検討や仮説検証などを行い、成果と課題としてまとめ、改善につなげたいと思う。

＜引用文献＞

注1）警察庁「少年を取り巻く情勢と警察の施策について」2004年3月
URL　http://www.npa.go.jp/safetylife/syonen14/no1pdf/no1sr2.pdf

注2）田丸敏高「社会的事象の理解とその発達」井上健治・久保ゆかり編『子どもの社会的発達』第７章 東京大学出版会 1997年、P.141

注3）菅野仁『ジンメル・つながりの哲学』NHKブックス 2003年、P.196

注4）ドミニク・S・ライチェン、ローラ・H・サルガニク『キー・コンピテンシー　国際標準の学力をめざして』明石書店 2006年、P.3

注5）田中智志編著『グローバルな学びへ　協同と刷新の教育』東信堂 2008年、P.216

注6）兵庫県警察「県下の少年非行　少年非行の概況（平成21年中）」
URL　http://www.police.pref.hyogo.jp/seikatu/shonen/index.htm

©金融広報中央委員会 2010

資料1　研究構想図

©金融広報中央委員会 2010

資料2　単元構想図

★仮　説★

相互依存関係を前提に、マネー・コンピテンシーを育むための学びの場を設定すれば、金銭的課題及び物的欲望に対峙したときに、意識的に貨幣的態度（＝対象を客観化し、距離化する態度）をとろうとする意欲と実践力を養うことができる。

★方　法★

コミュニケーション活動を学習活動の中心に据え、マネー・コンピテンシーと総合的な学習の時間で育てたい資質や能力の関連性を図りながら、自己の生き方を考えることができるような主体的な学びの場を設定する。

★ねらい★

お金に関する知識・技能を理解し活用する（知識・技能を活用する）
お金に責任を持つ（自律心と主体性を持つ）
お金に対する価値観を認め合う（価値観を認め合う）

Ⅰ：意識化（２ｈ）

①ブレーンストーミング

素材（テーマ）提示、場の設定、発問などにより、経験や知識を喚起させたり、発想に柔軟性を持たせたりして、課題意識を醸成する。

Ⅱ：焦点化（１ｈ）

②定型知の習得

前時の学習をもとに、経験や知識を整理し、そこから見出された教科と関連する基礎的・基本的な内容を知識として習得させる。

Ⅲ：具体的思考（１＋２＋２＝５ｈ）

③暗黙知・教養形成

④意思決定
価値判断

⑤価値の自覚

テーマに関して既有の経験をもとに考えたり、疑似体験をしたり、友だちと話し合ったりして、考えを深める。

体験と結びついた知識の育成を図り、共通の文化意識を明確にすることを通して、意思決定の幅を広げさせる。

価値を集団の中で批判・吟味したり、合意形成を目指したりする疑似体験を通して、実感として理解させる。

①道徳の時間における学習の補充・深化・統合を通して、道徳的価値を主体的に自覚させ、道徳的価値を定着させる。
②お金と人の心を見つめる活動を通して、お金の持つ両面価値に気付かせる。

Ⅳ：系統化・一般化（２ｈ）

⑥価値観形成

獲得した知識や価値をこれまでの学習や経験に関連付けて整理し、価値観を内在化させるとともに、実践意欲や実践力を高めさせる。

©金融広報中央委員会 2010

資料3　授業仮説の構造と主たる問い、及び育成できるであろうコンピテンシーの例

★仮　説★

相互依存関係を前提に、マネー・コンピテンシーを育むための学びの場を設定すれば、金銭的課題及び物的欲望に対峙したときに、意識的に貨幣的態度（＝対象を客観化し、距離化する態度）をとろうとする意欲と実践力を養うことができる。

★方　法★

コミュニケーション活動を学習活動の中心に据え、マネー・コンピテンシーと総合的な学習の時間で育てたい資質や能力の関連性を図りながら、自己の生き方を考えることができるような主体的な学びの場を設定する。

【第1次授業仮説】

“お金”について知っていることや経験を自由に発想させることで、お金に関する認識の程度を把握できる。

【問い】

“お金”という言葉から思いつくことと言えば何があるだろう。

【第2次授業仮説】

お金に関する事物を列挙し、キーワードで検討・整理することができれば、そこからお金の機能や役割を発見できる。

【問い】

お金にはどんな働きがあると言えるだろう。

【第3次授業仮説】

ことわざや慣用句など社会において共通の文化常識を教養として学び、生活と結びつけて考える活動を行えば、価値判断の基準を自己内に見いだすことができる。

【問い】

ことわざが伝えるメッセージはどんなことだろう。

【第4次授業仮説】

お金が介在する疑似的状況下での価値の交流、意思決定体験を通せば、自己・他者・社会とお金とのつながりについて実感的に学ばせることができる。

【問い】

お金のやりとりをはさむと、どんな言動をとり、その関係はどうなるだろう。

【第5次授業仮説】

自分たちの生活に切実かつ共感性の高い問題をテーマにした自作資料での価値の交流を通して、知識体系や価値体系を再構成させ、道徳的価値の自覚を深めさせることができる。

【問い】

お金が友だち関係に影響する時、どう対応すべきだろう。

【第6次授業仮説】

他者との交流を通してお金の持つ両面価値についての理解を深め、自己の価値基準を自覚させることで、よりよく生きるために必要なマネー・コンピテンシーを見出すことができる。

【問い】

お金において大切なこととはどんなことだろう。

- 他者とうまく関わる力
- 協力する力
- 知識や情報を認識したり、選択及び構成したりする力
- 知識や情報の質や適切性、価値などを批判的に検討し、評価する力
- 科学的知識を使用し、課題を明確にし、証拠に基づく結論を導き出す力
- 方法や技術（リテラシー）を獲得し、用いる力
- 新しい知識を獲得し、達成する能力

- 他者とうまく関わる力
- 協力する力
- 対立を処理し、解決する力
- 権利、ニーズ、限界などを能動的に主張する力
- 自らの行動と資源（時間やお金など）のバランスをとり実践する力
- 規範、社会、経済など大きな枠組の中で思考したり、行動したりする力
- 知識や情報を認識したり、選択及び構成したりする力

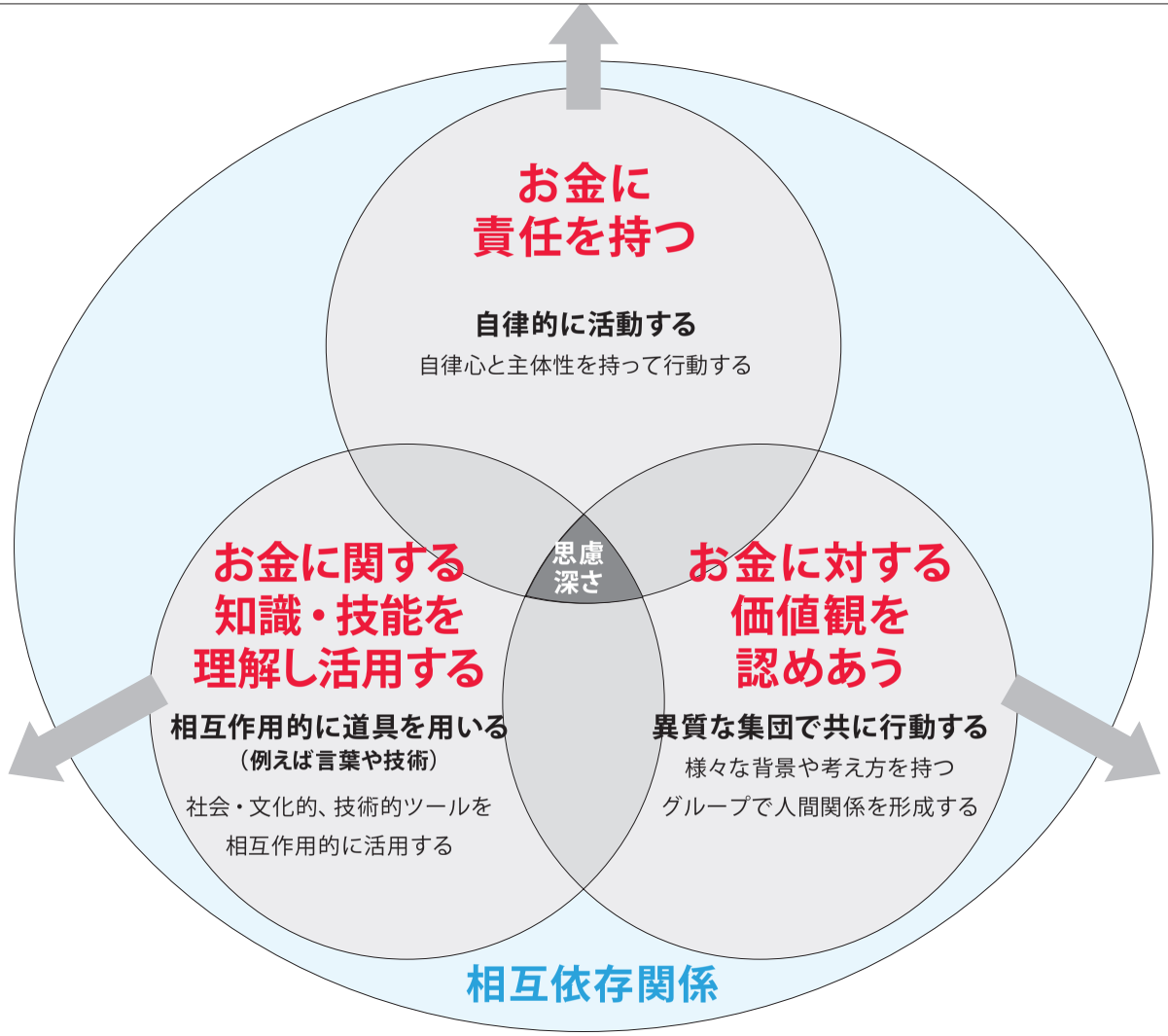
- 他者とうまくかかわる力
- 知識や情報を認識したり、選択及び構成したりする力
- 義務や目標などを持ち、自らの生き方を創造する力
- アイデンティティや自尊感情を高め、自己理念を確立する力

参考：ドミニク・S・ライチェン、ローラ・H・サルガニク『キー・コンピテンシー　国際標準学力をめざして』　明石書店　2006年

©金融広報中央委員会 2010

資料4　コンピテンシーの概念枠と育成できるであろうマネー・コンピテンシーの例

・金銭的対立や葛藤などの課題に関して、自己の権利やニーズ、限界などを能動的に主張しながら適切に処理し、解決することができる。
・自らの行動と収支のバランスをとり、実践することができる。
・自己利益に囚われず、規範、社会、経済など大きな枠組の中で思考したり、行動したりすることができる。
・お金に関する義務や目標（達成しなければならない、達成すべきである、達成したい）を持ち、自らの生き方を創造することができる。
・アイデンティティや自尊感情を高め、お金に関する価値基準を見出し、自己理念を確立することができる。またそれに従うことができる。



・経済活動、社会生活におけるお金に関する知識や情報を認識し、選択・構成したり、質や適切性及び価値を批判的に検討し、評価することができる。
・お金に関する科学的知識を使用し、課題を明確にし、証拠に基づく結論を導きだすことができる。
・労働、購買、貯蓄、消費、投資(贈与を含む)などの金銭管理の方法や技術を獲得し、用いることができる。

・金銭的対立や葛藤などの課題に関して、価値基準を相手や状況など必要に応じて交流することができる。
・価値観を認め共有した上で、妥当性を見出したり、妥協点を探り合意を形成したりするなどして、互いにプラスになる様な行動を見出すことができる。
・お金に関わる多様な価値観の中で、自己の価値基準とそれに伴う言動をメタ認知し、適宜検討・見直しながら、他者と良好な人間関係を形成することができる。

©金融広報中央委員会 2010

資料5　単元計画　（高学年用　全10時間）

学習過程		学　習　活　動	学習方法	学習形態	学習場面
【Ⅰ】 意識化 2 h	① ブレーン ストーミング	**“お金”について考えよう**			
		・「お金と言えば…」知っていること、関係すると思うことなどを書きだそう	ブレーン ストーミング法	個人	概念探求
		・みんなの意見を出し合おう		グループ	概念共有
		・出された意見をキーワードで分類しよう ・お金マップを作成し、紹介しよう	KJ法		概念図作成
【Ⅱ】 焦点化 1 h	② 定型知の 習得	**“お金”の役割を知ろう**			
		・お金マップからお金の役割や機能を考えよう ・お金の主要な機能を確認しよう	エグルール法	グループ	帰納的推理
				全体	定型知の習得
【Ⅲ】 具体的 思考 5 h	③ 暗黙知 教養形成 (1h)	**“お金”に学ぼう**			
		・先人たちはお金に何を学んだのだろう	CCテスト法	個人	暗黙知 教養形成
		・お金に関することわざから考えてみよう		グループ	
		・お金マップと比較して、関連性を見出そう	エグルール法	グループ	帰納的推理
		・心に残った1句を選び4コママンガを書こう	描画法	個人	価値判断
	④ 意思決定 価値判断 (2h)	**“お金”と“ひと・社会”を見つめよう**			
		・教育ゲームを通して価値判断や意思決定、合意形成を体験しよう	教育ゲーム	グループ 全体	疑似体験
		・ゲームを通して気づいたことをまとめよう		個人	価値習得
		・まとめた意見や感想を交流しよう		グループ 全体・個人	
		・お金と社会やひととの関係をまとめよう			価値形成
	⑤ 価値の自覚 (2h)	**“わたし” と“お金”を見つめよう**			
		・お金を間にひととのつながりを見つめよう	自作資料 事例研究	グループ 全体・個人	価値の 明確化
【Ⅳ】 系統化 一般化 2 h	⑥ 価値観形成	**“わたし”と “お金”を創造しよう**			
		・お金とのつながりをもとに、お金において大切だと思うことを絵に描こう ・絵にキャッチコピーをつけよう	描画法	個人 全体	価値の形成 価値の交流
		・幸せに生きるために必要なお金にかかわる力を見出そう ・自分の考えを交流しよう	ルーレッグ法		

＜その他学びの場の例＞
学校行事：非行防止教室
算数科：“割合”
社会科：“価格や費用”
家庭科：“生活設計、消費生活”

注）本資料を作成するにあたっては、浅野良一氏（兵庫教育大学大学院教授）の授業資料「各種研修技法の活用方法」を参考にした。

＜参考文献＞
馬庭清志「授業がイメージしやすい書き方ヒント」『社会科教育』No.601（2009年5月号）明治図書 2009年5月、P.96

©金融広報中央委員会 2010